

先達からのメッセージ

山のあいさつ・街のあいさつ

山形県
酒田「小さな親切」の会
代表 前田直己

前田直己（まえたなおみ）
昭和20年、山形県生。早稲田大学卒。東北大学大学院修了。前田製管株式会社取締役社長、取締役会長、相談役を歴任。平成20年、酒田「小さな親切」の会代表に就任、現在に至る。その他、山形大学農学部客員教授、鶴岡工業高等専門学校客員教授等をつとめる。

昨今のマスコミ報道では、目を覆いたくなる話や耳を塞ぎたくなる話が多くありますが、中にはほっと心が休まるニュースもあります。周防大島町の山中に迷い込んだ藤本理稀ちゃんを、大分県から捜索活動の応援に駆けつけた尾島春夫さんが、無事救助したニュースは、多くの人が我がこのように喜び、尾島さんに称賛の拍手を送ったと思います。尾島さんの行為は、「小さな親切」運動そのものです。

20年も前のことで正確には覚えていませんが、九州の由布岳や祖母山に登ったときのこと。登山道の修理をしていた尾島さんにすれ違った記憶が微かに残っています。作業中の尾島さんに「ご苦労さん！」と声をかけると、「ありがとう。気を付けて！」



と返事が返って来たように記憶しています。テレビで見た尾島さんは「赤いタオルの鉢巻」をしていました。あの時も同じ様相だったように思います。

話が横道に逸れましたが、山登りをする人はすれ違う人に、「こんにちは。気をつけて！」と声をかける風習があります。山登りをする人たちのあいさつは、限りなく100%に近い数字になります。山では、見ず知らずの人と平気にあいさつや会話をしますが、地上に降り立つと何故できなくなるのでしょうか？

10年程前、大学院に通っていた私は仙台市の小学校前で、登校する児童に「おはよう」と声をかけました。当時、私は60歳後半の初老で、服装はスーツ姿。「おはよう」と言う言葉に、返答してきた児童は以下の表の割合でした。鳥海山の麓の遊佐町でも、病院脇の通学路で同じ質問をした結果と比べると、違いは一目瞭然。この差

は、都市の規模によるものか、地域を構成する人間性なのかはわかりません。

家庭内での会話、隣近所でのあいさつ、学校や職場でのあいさつは人間生活の基本です。世の中でスムーズに生きてゆくための一つ的手段として「あいさつ」を捉えると、新たな展開と考えられます。学校が指導する「見知らぬ人とは 言葉を交わさないように」ということは、如何なものかと考えます。

最初から、知っている人だけの世界は存在しません。

	仙台市	遊佐町
返答してきた児童	20%	50%
元気よく返答した児童	10%	10%
うつむいたまま通り過ぎた児童	30%	30%
無言で通り過ぎた児童	40%	10%



*15頁に前田代表の出版された本を紹介しています。